

日本語の敬語 ～ 語法と話し手に対する評価に与える影響～

キーワード：丁寧語、普通形、敬語回避ストラテジー、スピーチスタイル、距離、スタイルシフト

1. はじめに

日本語学習者から寄せられる悩みの一つに日本人と親しい関係になるのが難しいというものがある。その原因の一つに学習者の敬語の使い方の問題があるのではないだろうか。

日本語教育では敬語、主に「です・ます形」と呼ばれる丁寧語に重点が置かれている。敬語を使いこなせることは日本語を話す上で当然不可欠なことである。しかし、日常生活、主に友人同士の会話では敬語を用いないスピーチスタイル、いわゆる「タメロ」と呼ばれる主に普通形を用いたカジュアルな表現が使われることが一般的である。そしてこれを使うことは相手との距離が近いということの証明でもある。事実、交流のあった日本人に「タメロでもいいよ。」と言われたが、使い方がわからなかったという話もきく。その日本人は相手との距離を縮めたいという意図がありそう申し出たのだと思われるが、いつまでも丁寧語で話していると距離を縮められない、それどころか自分と仲良くしたくないのかと思わせてしまうことになりかねない。

では実際日本語母語話者はスピーチスタイルをどのように使い分けているのだろうか。そして日本語学習者はどうだろうか。本研究では実際の会話での両者の言語使用、またその両者の違いを明らかにする。さらに、非母語話者の敬語使用について母語話者はどのような印象を持っているのか、それが両者の関係にどのような影響を与えるのかを調査する。

その結果を踏まえ、普通形を使用した話し方、くだけた話し方が日本語教育で重視されるべきか否かを考察する。

2. 研究課題

本研究を実施するにあたって次の4つの課題を設けた。

- (1) 日本語母語話者は同じ年齢の相手と話す際どのスタイルをとるのか
- (2) 非日本語母語話者は同じ年齢の相手と話す際どのスタイルをとるのか
- (3) 非日本語話者の言語使用について母語話者はどのような印象を持ち、またそれがどのように両者の関係に影響を与えるのか
- (4) 普通形を使用した話し方は日本語教育で重視されるべきか

3. 先行研究

Ide (1989)によって提唱された“wakimae”という概念は日本語の「場をわかまえる」という言葉からきている。Ideによると日本社会ではその個人が置かれた立場や状況によって行動することが期待されており、wakimae による言語使用

は相手との関係における自身の社会的立場や状況への認識を表すとしている。これを踏まえ、Ikuta(1983)はwakimaeとは話者と聞き手との間の距離を表すことであり、「です/ます」つまり丁寧語の使用は、敬意やその場のフォーマルさよりはむしろ心理的距離を表すとしている。Maynard(1997)は不必要にフォーマルな言語使用は相手との間に大きな距離を作り出すこととなり、状況によってはこれを避けることが相手とのよりよい関係のために必要であり、敬語使用の回避はコミュニケーションテクニックの一つだと主張している。

Neustupney(2000)によると、日本人は敬語と非敬語の両方を相手との距離を調節するために使い分けている。つまり状況に応じてスピーチスタイルをシフトさせており、さらに場合によって敬語を避けるためのストラテジーを用いている。Neustupney はこれをHonorific Avoidance Strategies (敬語回避ストラテジー)と呼び、その中には、1. 敬語を必要とする述語を用いない 2. 文章を続け、終わらせない などがある。

4. 方法

本研究に際して実施された調査の対象、方法、分析方法は次のとおりである。

4-1 調査対象

4-1-1 対象者

18歳から30歳までの女性

4-1-2 言語対象

- (1) スピーチスタイル 丁寧語か普通形か
- (2) 文末 (です/ます)

4-2 データの収集

4-2-1 初対面の母語話者同士の会話の録音

4-2-2 初対面の母語話者と非母語話者の会話の録音

それぞれ初対面の同じ年齢の話者5ペアに1時間会話をしてもらい、その会話を録音した。

初対面の話者としたのは、年齢などが同じ場合敬語を使用するかどうかは両者の距離、つまり親しさのみによることとなり、話者がその距離をどう認識するかを調査するためである。

4-2-3 非母語話者の言語使用に対する母語話者の評価

非母語話者5名の丁寧語、普通形両方の会話を母語話者にきかせ、その印象を問うアンケートを実施した。最後にその話者と友達になりたいかどうかを問うた。

4-3 データの分析

4-3-1 会話の録音の分析、比較

会話の録音の文末に現れるスタイルを分析し、母語話者と非母語話者の言語使用の違いを比較した。

4-3-2 評価テストの分析

母語話者へのアンケートを分析、考察した。

5. 結果と考察

5-1 母語話者の会話

母語話者の会話からは状況に応じて様々な結果が出た。例えばあるペアでは同じ年齢としたはずだが、学年に1学年の差がありそれを被験者が最初に発見することとなり、両者の会話は年下の被験者が丁寧語、年上の被験者が普通形を終始使用するという結果となった。会話の始めに年上の被験者が「タメロでいいよ。」と促したが、年下の方が「でも一度年上だということがわかってしまうと・・・」と躊躇する会話が録音されている。この2名に学年差があったことは調査ミスであったが、日本における年齢(学年)の差における言語使用の実態を表す結果ともなった。

他のペアは丁寧語、普通形両方を使い、時間の経過に伴って、丁寧語使用が減少し、普通形使用が増加する傾向が見られた。つまり会話の過程でスタイルシフトが生じた。年齢が低いペアの間にこの傾向が顕著であった。

また母語話者は敬語回避ストラテジーを非常に頻繁に使用する傾向が見られた。

なお、分析した会話は母語話者同士の会話のみとし、非母語話者と会話した母語話者の会話は分析対象としていない。母語話者は非母語話者と話す際、いわゆるフォーリナートークを使用することがあり自然な会話とは言えないと判断したためである。

図1に結果の一部を示す。

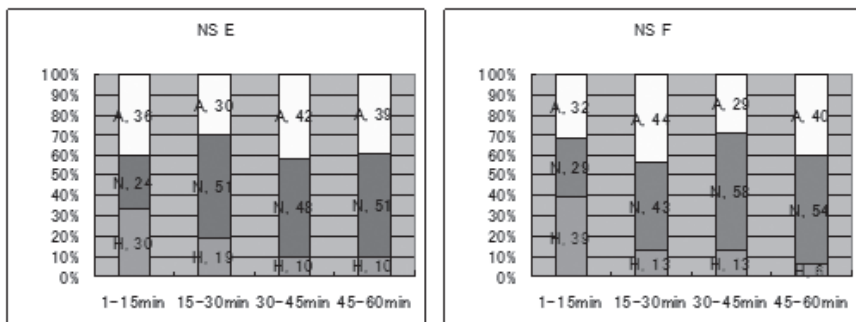


図1-母語話者の丁寧語 (honorific=H)、非丁寧語=普通形(non-honorific=N)敬語回避(honorific avoidance=A)の使用頻度

5-2 非母語話者の会話

5名のうち、4名は丁寧語のみを使用、1名は普通形のみを使用していた。この1名は母親が日本人で日本語は母親や身内との会話で覚えたが学習したことはなく、最初に「丁寧語が使えない」と会話の中で断っている。他の4名は成人し

てから日本語を学習した非母語話者である。いずれにせよ母語話者との違いが明らかであったのは、母語話者は会話の途中でそのスピーチスタイルを変えなかったことである。

さらに、母語話者の会話では頻繁に見られた敬語回避ストラテジーが非母語話者の間ではほとんど見られなかった。

図2に結果の一部を示す。

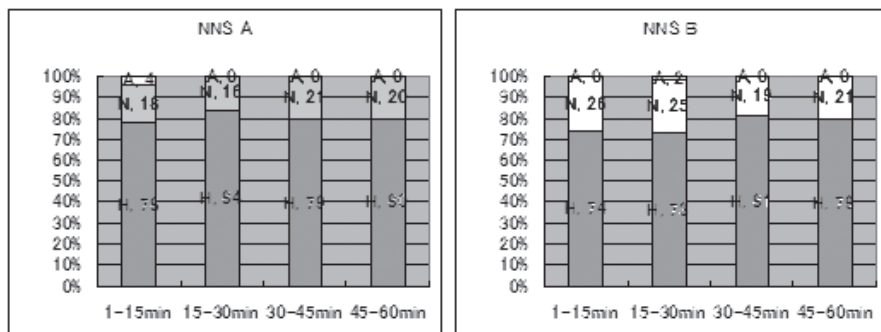


図2- 非母語話者の丁寧語 (honorific=H)、非丁寧語＝普通形(non-honorific=N)敬語回避 (honorific avoidance=A)の使用頻度

5-3 評価テスト結果

日本人を対象に行った非母語話者の言語使用に対する評価のアンケートでは、「親しみを感じる」「優しい」と言った友人同士になるために重要と考えられる項目で普通形を使用している話者に対して評価が高かった。

一方「尊敬できる」や「礼儀正しい」など、目上の立場にある場合、または目上のものと話す場合に重要だと考えられる項目では、丁寧語を使用している話者に対して評価が高かった。

また「この話者と友達になりたいと思いますか。」という問いに対しては、普通形を使用している話者と友達になりたいと答えた回答者の割合が高かった。

6. 結論

本研究結果は日本語母語話者と非母語話者の言語使用の特徴を示すものであり、両者の違いを明らかにした。

5で示したように母語話者の会話では丁寧語から普通体へのスタイルシフトが見られたが、非母語話者の間では見られなかった。また、母語話者の会話では敬語回避ストラテジーが頻繁に使用されていたのに対し非母語話者にはほとんど使用されていなかった。

先行研究では母語話者がスタイルシフトや敬語回避ストラテジーを用いる

のは相手との距離を保ったり縮めたりするためであり、よりよいコミュニケーションのための戦略であると考えられているが、母語話者がこれを日常的に用いているのに対し、学習者の使用が限られているのは問題であると思われる。

また普通体を使用する非母語話者に対して、友人関係を築くために重要だと考えられる項目に高い評価が与えられたこと、友達になりたいという回答がより多かったことは普通体を使用したスピーチスタイルの重要性を示唆している。

以上の結果から日本語教育において普通体を使用した話し方を教えることが強化されるべきだという結論に達した。

7. 今後の課題

研究結果から普通形を教えるべきだという結論に至ったが、そこには課題が残る。まず、普通形はそれだけで用いられることが少なく、「よ」や「ね」と言った終助詞を伴うのが一般的である。よってこの終助詞の使用方法を教える必要がある。

また本研究で明らかになった母語話者の会話の特徴は敬語回避戦略を頻繁に使用するという点である。これは丁寧語から普通形へとスタイルをシフトさせる際に頻繁に用いられるものと思われるが、これも教えていく必要がある。

そして学習者にとって最も困難なことは、その形式ではなく、いつどのような場面でどのスピーチスタイルが用いられるかを学ぶことではないだろうか。それを教室という限られた場所でどのように教えていくかも課題である。

また普通形を取り入れる時期も考えなければならないことの一つである。本研究では普通形を教えることの重要性を考察したが、敬語が使える学習者ということが大前提である。敬語を使えないまま普通形を覚えてしまい、敬語を使うべき相手に対しても普通形で話してしまうことの方が重大な問題だからである。

これらを踏まえ、様々な角度から教授方法、教授時期などを考察していく必要があるだろう。

参考文献

Ide, S. 1989. Formal forms and discernment: Two neglected aspects of linguistic politeness. *Multilingua* 8-2/3: 223-248.

Ikuta, S. 2003. Discernment system. in Koike, I.(ed). *Kenkyusha Dictionary of Applied Linguistics*. 214. Tokyo. Kenkyusha.

Maynard, S. K. 1997. *Japanese Communication*. Honolulu. University of Hawai'i press.

Neustupny, J. V. 2000. Keigo/taiguhyogen/poraitonesu to syakai kankei. In *Gendai nihongo hikkei*. Bessatsu kokubun gaku 53, 67-72.